不安が強くなり，わが子を虐待して殺すのではないかと精神科を受診した。精神療法と育児指導で解決。

〔事例 13〕

二卵性同性双生児の第２子。男。父方家族は迷信深く多胎を忌避，二卵性であったことから母の責任とし，母方実家で第２子を養育させた。学令となり父母の許に戻るが，未熟児，難産のためか，第２子は第１子より精神，身体面の発育が劣り，そのため祖父，父が厳しい折かんを加え，待遇を差別した。学業不振，多動，盗みなどの問題行動を生じ，それが悪循環となって更に虐待をひき起した。

〔事例 14〕

馬場，村田の報告例。卵性不明の双胎の第１子，出生時体重 2,100 g。未熟児室41日入院。３歳まで流動食と少量の粥しか与えられず，３歳１ヶ月入院。半昏睡状態。気管切開，入院後も母親の拒否的行動著明。結局乳児院に収容されたが，発育は著しく遅滞。対偶者には正常な養育行動を示していた。

〔事例 15〕

増本，七種の報告例。卵性不明の双胎の女児２人とも死亡に至る。在胎29週第１子 1,100 g，第２子 750 g，それぞれ111日，118日未熟室入院，退院２ヶ月目に第１子嘔吐，意識障害で入院死亡。硬膜下血腫。第２子は１歳２ヶ月に第１回入院。その後栄養障害，骨折などで入院をくりかえし，２歳５ヶ月で死亡した。

**3. おわりに**

未熟児室収容による早期親子関係の障害や，周産期異常による精神運動遅滞その他の要因により，未熟児室出身者に被虐待児が多いことが従来よりいわれているが，今回はその56.1%が未熟児といわれる双生児を中心として，多胎児と児童虐待の関係を考察した。

〔文　献〕


1) 池田由子：児童虐待の病理と臨床，金剛出版，1980.
2) 馬場一雄，村田　直：未熟児出身者で被虐待児症候群と思われた１例，厚生省，小児慢性疾患（臓器系）に関する研究報告書，1982.
3) 増本　義，七種啓行：未熟児出身者での被虐待児症候群，同上，1981.


# Expremature child の身体発育について


東邦大学周産期センター　藤　井　と　し
宇　賀　直　樹


〔研究目的〕

未熟児の身体成長におよぼす因子がどんなものであるかを究明する。すなわち，SFD 児の胎内栄養不全や，超未熟児の出生後の栄養不良等が Catch up growth 後の成長に影響を与えているか，否かを究明する。また，我々の取扱ってきた未熟児の成長，曲線を作成し，正常児，他施設の未熟児の成長曲線を比較する。

〔研究対象および方法〕

昭和48年以後，都立築地産院に入院し，生存した超未熟児17例（男児６例，女児11例），出生体重 1,000～1,500 g 未満，AFD 未熟児 24例（男児11例，女児13例），1,500 g 未満 SFD 児９例について，身長，体重，頭囲を比較した。年令は，予定日よりの修正年令を用いた。各年令時の身長，体重を，その前後の実測値より比例計算し，その時の値とした。

〔結　果〕

身長は，超未熟児，1,000～1,500 g の AFD 未熟児，SFD 未熟児の三群において，修正年令０日では，有意の差がみられるが，１才頃より有意差はみられなくなる。２才時には，超未熟児，AFD 未熟児とも，正常新生児の平均値とほぼ等しくなるが，SFD 児のそれは，正常新生児の平均値より下降している。しかし２才６ヶ月をすぎると，三群の間にはほとんど差がみられなくなる。

体重は，６ヶ月頃迄，各群に有意差がみられるが，その後は有意差はなくなる。超未熟児と AFD 未熟児の間にはほとんど差がなくなってくる。SFD 未熟児も２才以後序々に他の群に近づいてくる（表１）。

表 1

| | | 40週 | 6M | 12M | 2才 | 3才 | 4才 | 5才 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 身長 | 1,000 g 未満 | 45.6±3.1(17) | 64.6±2.5(17) | 73.2±2.4(16) | 84±2.8(15) | 90.6±4.4(12) | 98.6±5.6(9) | 103.8±2.2(5) |
| | 1,000～1,500 g | 47.6±2.9(24) | 66.2±2.4(21) | 74.4±3.2(19) | 83.8±3.6(20) | 90.5±3.1(20) | 98.4±3.6(13) | 105.8±1.8(8) |
| | 1,500 g 未満 SFD | 43.3±3.3(9) | 63.0±2.3(9) | 72.3±2.7(8) | 82.7±2.6(8) | 90.3±2.4(9) | 97.6±1.7(4) | — |
| 体重 | 1,000 g 未満 | 2,570±601(17) | 6,530±464(17) | 8,360±642(16) | 10,635±1,237(14) | 12,319±2,314(12) | 13,863±1,683(8) | 15,642±1,870(5) |
| | 1,000～1,500 g | 2,985±604(24) | 7,173±866(23) | 8,687±1,110(22) | 10,882±1,274(23) | 12,598±1,213(21) | 14,473±1,518(13) | 16,529±989(8) |
| | 1,500 g 未満 SFD | 1,948±429(9) | 6,705±766(9) | 7,965±850(8) | 10,180±968(8) | 12,210±1,318(9) | 13,400±1,831(4) | 15,017±2,275(3) |

表 2

| | 1才時 | 3才時 | 5才以上 |
|---|---|---|---|
| 体重 | 91.075±11(16) | 92.3±9.8(17) | 93±8.5(17) |
| 身長 | 99.1±4.1(15) | 99.1±4.9(16) | 99.1±2.3(16) |

5才以上 Follow できた 1,500 g 未満，AFD 未熟児について各年令の平均値を 100 とした時の値を比較してみた(表 2)。

以上のように，体重は 3 才以後も序々に平均に近づくと思われたが，身長においてはほぼ不変即ち，1 才迄にほぼ Catch up する可能性があると思われた。

修正年令 0 日の，身長，体重，頭囲，体重/身長比と，2 才時の身長とに相関々係があるか否かを検討してみた。0 日の身長と 2 才時の身長との間，0 日の体重と 2 才時の身長との間には夫々有意な相関々係がみられた。しかし頭囲および 体重/身長$^3$ 比と 2 才時の身長との間には，全く相関々係はみられなかった。また，2 才時の体重と体重/身長$^3$ 比との間にも相関々係はみられなかった。

〔考　案〕

今回我々の作成した未熟児用 growth chart は他の物と同じ傾向を示したが，全く同じというまでには到らなかった。特に身長に関しては，超未熟児，1,500～1,000 g AFD 未熟児とも早期より厚生省の統計数値と変らない値を示した。これは，いまだ未熟児の長期に Follow されている数の不足によるばらつきとも考えられ，全国的調査が必要と思われた。

Catch up は 2 才までに終了するのか，それ以後もひきつづきおこるのか，また出生前後の発育の遅れは，終生にわたり影響をおよぼすのかの疑問はいまだ不明である。しかし数少ない検定結果では，2 才迄にほぼ成長の遅れはとりもどし，全体としては正常範囲となると考えられる。今後数を増やし，より確実な結論を出すことが必要と考える。

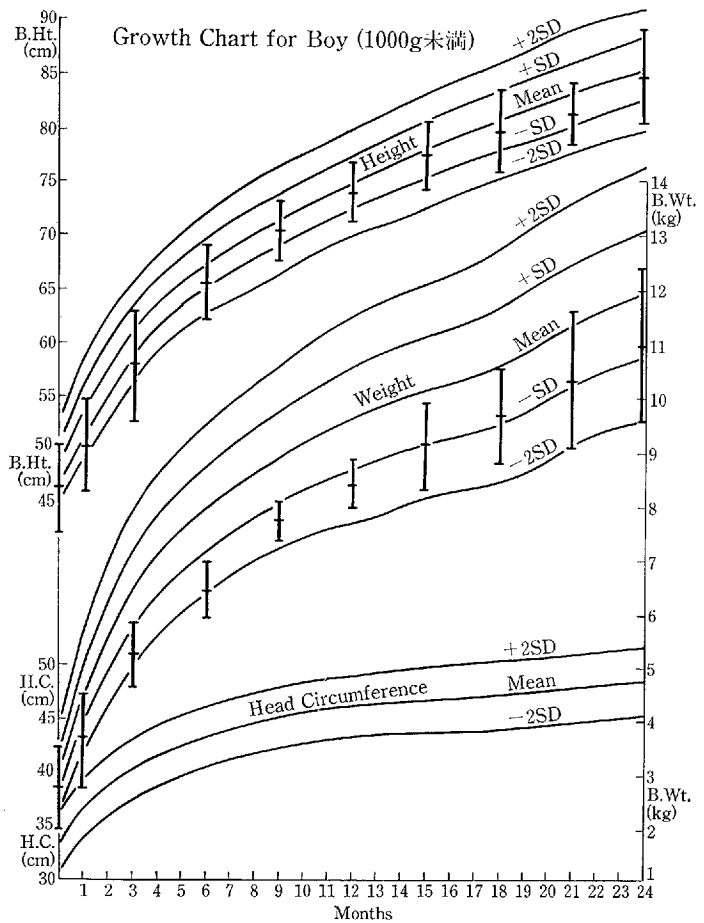
Growth Chart for Boy (1000g未満)
B.Ht. (cm)
B.Wt. (kg)
H.C. (cm)
Height
Weight
Head Circumference
+2SD
+SD
Mean
−SD
−2SD
Months

図 1

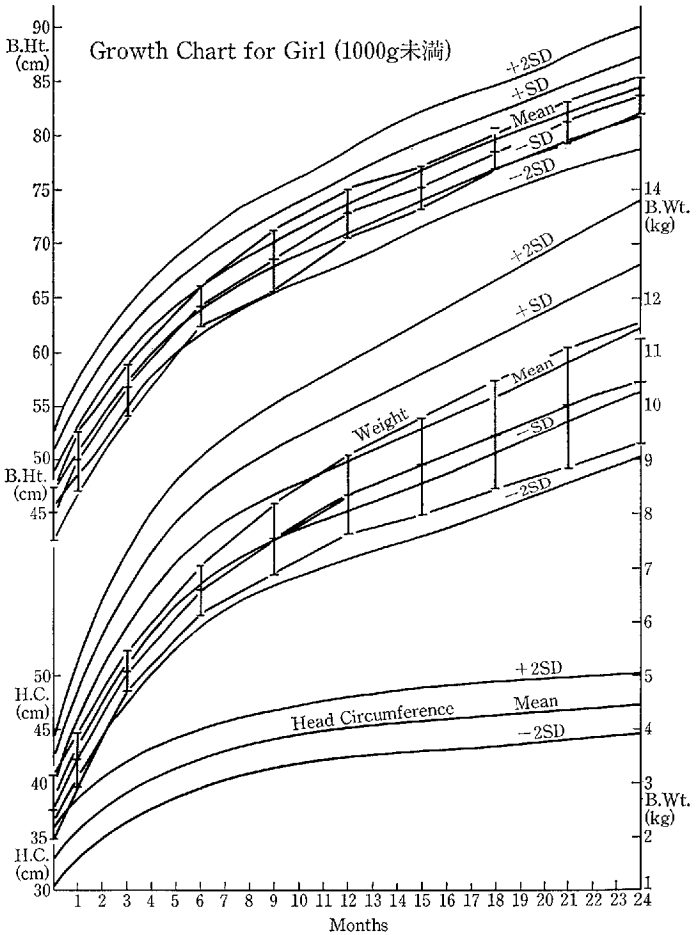
Growth Chart for Girl (1000g未満)
B.Ht. (cm)
B.Wt. (kg)
H.C. (cm)
Weight
Head Circumference
+2SD
+SD
Mean
−SD
−2SD
Months

図 2

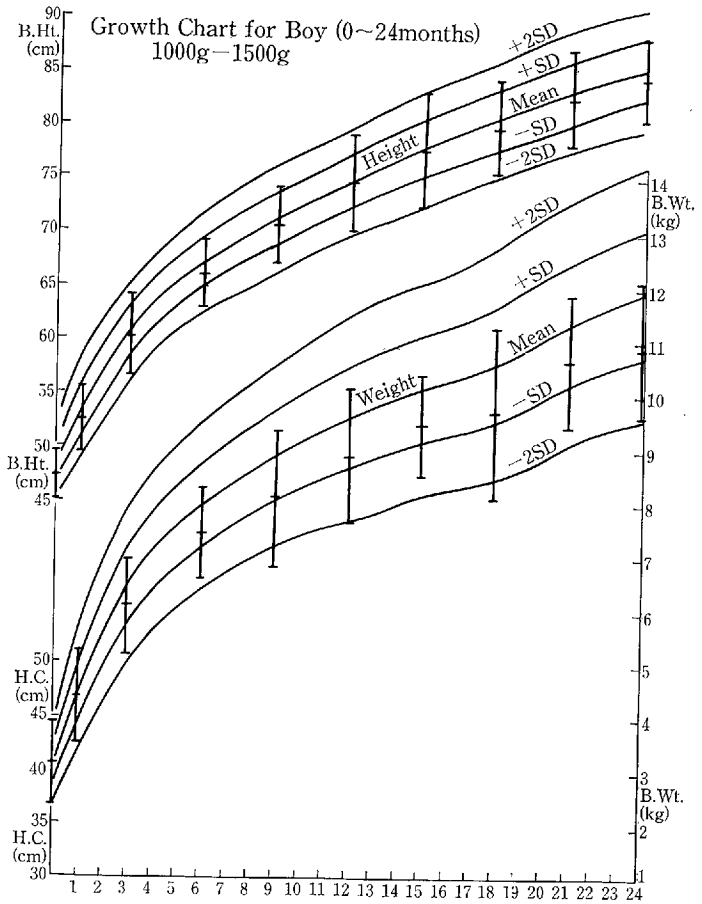
Growth Chart for Boy (0~24months)
1000g−1500g
B.Ht. (cm)
H.C. (cm)
B.Wt. (kg)
Height
Weight
+2SD
+SD
Mean
−SD
−2SD

図 3

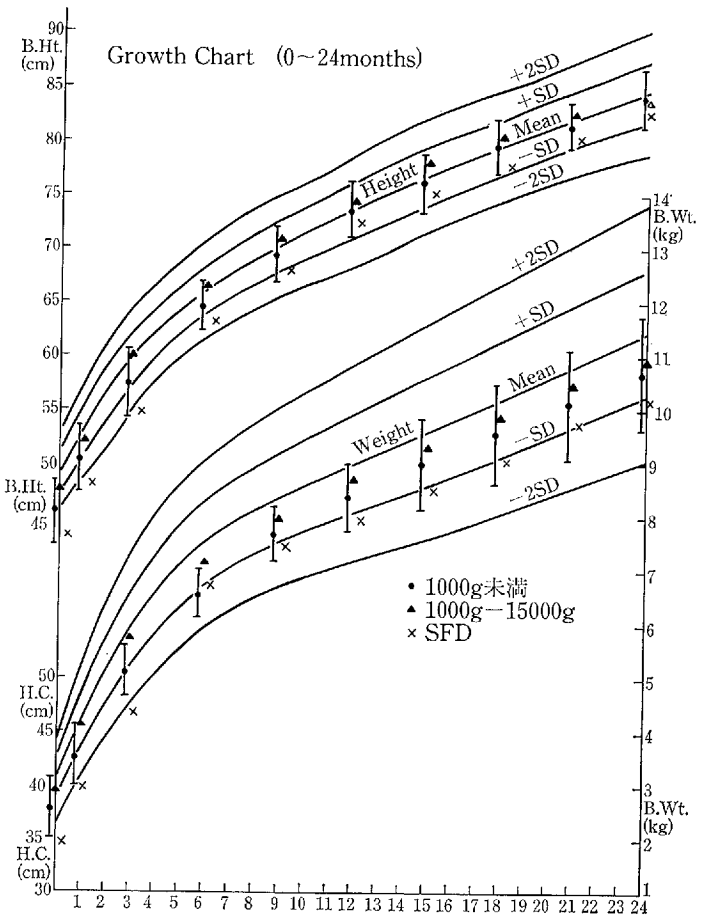
Growth Chart (0~24months)
B.Ht. (cm)
H.C. (cm)
B.Wt. (kg)
Height
Weight
+2SD
+SD
Mean
−SD
−2SD
• 1000g未満
▲ 1000g−15000g
× SFD

図 4

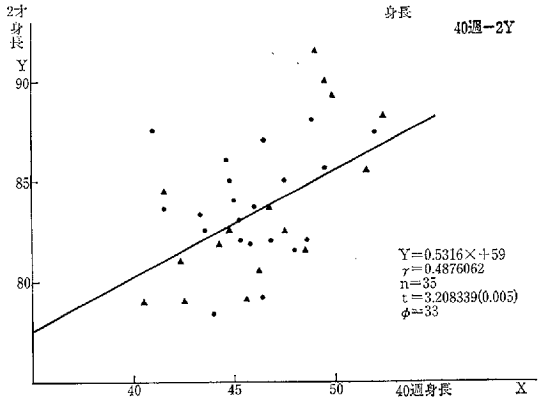
身長
40週−2Y
2才身長
Y
90
85
80
40
45
50
40週身長
X
Y=0.5316×+59
γ=0.4876062
n=35
t=3.208339(0.005)
φ=33

図 5

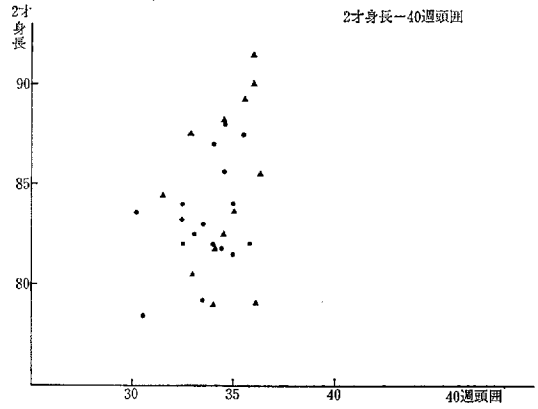
2才身長−40週頭囲
2才身長
90
85
80
30
35
40
40週頭囲

図 7

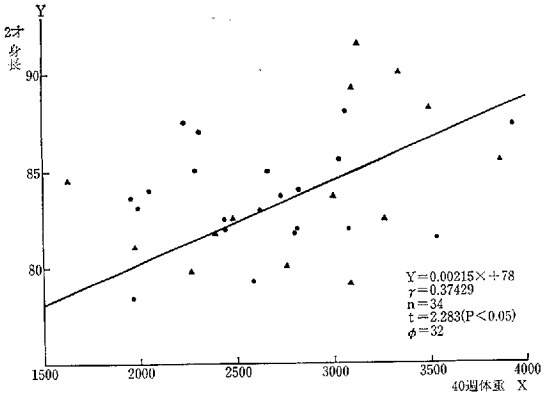
Y
2才身長
90
85
80
1500
2000
2500
3000
3500
4000
40週体重 X
Y=0.00215×+78
γ=0.37429
n=34
t=2.283(P<0.05)
φ=32

図 6

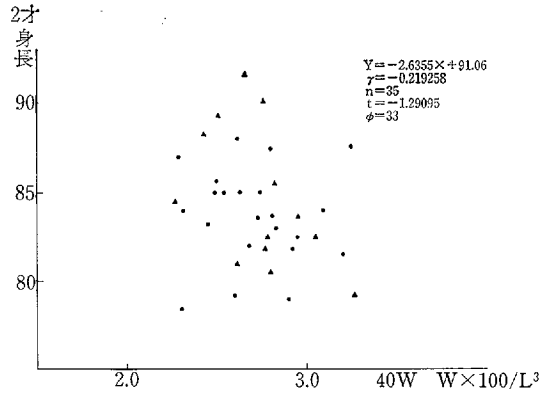
2才身長
90
85
80
2.0
3.0
40W W×100/L³
Y=−2.6355×+91.06
γ=−0.219258
n=35
t=−1.29095
φ=33

図 8

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

〔研究目的〕

未熟児の身体成長におよぼす因子がどんなものであるかを究明する。すなわち,SFD 児の胎内栄養不全や,超未熟児の出生後の栄養不良等が Catch up growth 後の成長に影響を与えているか,否かを究明する。また,我々の取扱ってきた未熟児の成長,曲線を作成し,正常児,他施設の未熟児の成長曲線を比較する。